

デザインエッセンス—和を考える—風景・凝縮・かたより 和の本質と魅力、現代への適応

■日時 2004年8月12日(木) 18:00~20:00

■会場 日本教育会館

■講師 法政大学社会学部教授 田中優子氏

講義内容:日本の意匠(デザイン)は長い歴史があり、どの時代を取り上げるかでその特徴は違ってくる。どのような国や地域のデザイン感覚であろうと、それは長い歴史の上で積み重ねられてきたものであり、その独自性、個性は他のものとの関わりの中で作られてきたものである。ここでは江戸時代のデザインを取り上げ、和の本質と魅力、現代への適応を考察します。江戸時代のデザインは中国、インド、西欧の影響を大きく受けており、それらを独自に変化させたものである。その改変の方法の独自性が、日本の絵画・版画・デザインの特徴となった。また江戸のデザインは他の領域、とくに文学の影響を強く受けている。「風景の着物」は世界のどこにもない独特な意匠であるが、これは文学とのかかわりで出現したものである。

(1)江戸時代のデザイン感覚の特徴のひとつは「かたより」である。「アンシンメトリー」と言ってもいいが、それよりもっと極端に大胆にばっさりトリミングする方法で、広重だけのものではなく、浮世絵一般に見られる傾向である。切り取り、隠すことによって、見えない空間の経過や描かれている人や物の動きを感じ取ることができる。障害物や傾きを導入することによって、その場にいるかのような臨場感が得られ、見る者が歩いているような錯覚を起こす。江戸時代の前半から浮世絵は遠近法を取り入れたが、遠近法には二つの方法があった。ひとつは西欧遠近法そのままの「浮絵」であり、もうひとつは「近景と遠景を組み合わせた遠近法」である。後者にすぐれたものが多く、さまざまなデザインに使われた。(2)絵巻をはじめとして、日本では古くから長大な物語を「シーン」化して小さな空間に圧縮する方法にすぐれていた。たとえば俵屋宗達はその方法で扇のデザインをしていたデザイナーである。その「凝縮」は着物、櫛、刀の鏝(つば)、たばこ入れ、弁当箱、印籠、手ぬぐいなどに現れた。また「凝縮」の方法は「シーン化」とともに「パロディ化」があった。江戸時代では「パロディ」や「みたて(笑い)」がさかんでユーモアに満ちた「笑いのデザイン」であふれている。これは明治以降デザインの世界から消えてゆく。(3)「かたより」「凝縮」と関係があるはずだが、江戸時代のデザインは余白を好む。中国から強く影響を受けた磁器でも、アンシンメトリーに構成し、余白をとる構成方法で日本のデザインを作り上げた。それは着物のデザインにも見ることができる。(4)「粋」は江戸時代特有の美意識だが、その背景にはインドの影響、歌舞伎と遊廓、男装を伝統とする女性芸人の存在、そして庶民の生活環境、暮らしぶりなど生活に密着した様々な要因の関わりの中で作られたものと思われる。

大変有意義な講義内容で、デザインを大いに楽しむ江戸の人々の洒落と遊び心に感銘を受けるものがありました。(中山 陽子)